

カシやナラなどの炭材に恵まれていた上総丘陵地では古くから燃料としての炭焼きが行なわれていました。

江戸時代には、君津市の小糸川や小櫃川などの上流から焼かれた炭が川舟で河口まで運ばれ、さらに江戸へと供給されていたのです。

江戸という大消費地に販路があったこの地の炭焼きは重要な産業となり、さらに明治、大正、昭和と輸送手段の変遷とともに隆盛をきわめ、東京オリンピックを三年後



市宿三経寺にある半兵衛の顕彰碑

に控えた昭和三十六年でも清和地区木炭検査数量は七万五千俵ありました。しかし昭和四十一年には四万七千俵と激減し、やがて利用に便利な化石燃料にその座を奪われていったのです。

このように隆盛をきわめた炭焼き産業の陰には土窯半兵衛と呼ばれる偉人の存在がありました。

それでは土窯半兵衛と呼ばれる人物について尋ねてみることにいたします。

### 半兵衛の功績

君津市市宿の浄土宗三経寺には半兵衛を称える顕彰碑があります。顕彰碑はこの地方の産業として炭焼きがまだ盛んだった昭和二十八年に建立されたもので、碑文には次のように刻まれています。

俗名常盤半兵衛 相州土肥鍛冶屋村ニ生ル、宝歴年間(一七五一〜一七六四)本郡山間部落ヲ訪レ築窯製炭ノ指導ニ献身、住民ニ其ノ祖ト仰ガレツツ安永元年十二月十一日(一七七二)秋元村ニ没ス、郷人土窯半兵衛と敬称今尚其ノ徳ヲ讃フ當地方ハ農耕特産ニ恵マレズ生計タメニ窮迫セルモアリシガ氏ノ指導ニヨリ「上総木炭」ノ名聲

ハ江戸横浜ニ洽ク住民皆其ノ堵ニ安ンズルニ至ル尔来二百年草創ノ恩人トシテ明治年間三石山ニ碑ヲ建テ些カ顕彰スル處アリシガ星霜久シキニ亘ルニ及ビ其ノ効績ノ埋ルコトヲ惧ルルニ至ル 時恰モ當地ハ縣下ニ於ケル大量生産ト技術ノ優秀ニヨリ愈々盛運ニ向イツツアリテ即チ永遠ニ其ノ功ヲ讃エ勞苦ヲ憫ブタメノ有志相圖リ更ニコノ碑ヲ建立ス

昭和二十八年十二月

題字 千葉縣知事

柴田 等書

碑文 君津地方事務所長 鈴木義光書

この碑文にあるように半兵衛の本名は常盤半兵衛といえます。土窯半兵衛という名前はその功績の偉大さをたたえた俗称だったんですね。

碑文には「郷人土窯半兵衛と敬称今尚其ノ徳ヲ讃フ」とありますが、これを裏付けるように最近発見され、解説を進めている市宿「星野家日記」の安永元年十二月に次の記載がありました。

一 土釜半兵衛病氣ニ付極月七日出立ニて上丁与兵衛相州土肥鍛冶屋村有右衛門殿方へ飛脚ニ遣申候ニ付同国根符川御関所手形我等方より

差添遣申候 則文言控

差上申一札之事

一此者老人相州土肥鍛冶屋村へ罷越申候  
往来共御関所無相違被遊御通可被下候

以上

曾根鉄之助知行所

上総国周准郡市宿村

名主彈藏印

明和九壬辰年十二月七日

相州根符川

御関所様

※土釜は土窯におなじ。極月は十二月のこと。

星野家は代々市宿村の名主を務めていた。

日記では、市宿に住んでいた半兵衛が病  
気になったので、その様態を生まれ故郷鍛  
冶屋村(現在は湯河原町鍛冶屋)の有右衛門  
に知らせるため市宿上町の飛脚与兵衛を遣  
わしたと書かれています。それは半兵衛が  
亡くなる四日前のことでした。

この日の日記の冒頭部分はとても重要だ  
と思います。

それは半兵衛が生前から地域の人々に親  
しく土窯半兵衛と称されていたことが分か  
ったからです。

顕彰碑には半兵衛の功績として「築窯製

炭の指導」と書かれているだけですが、生  
前から土窯半兵衛と呼ばれていたというこ  
とを考えれば、「土窯といえは半兵衛、半兵  
衛といえは土窯」といわれるほど「土窯づ  
くり」に功績があつたことを裏付けている  
ものと考えてよいのではないでしょうか。

土で窯を作つて炭を焼くことは、それほ  
ど画期的な出来事だったのですね。

次回はなぜ画期的な出来事だったのかを  
考えてみましょう。  
(木曾野正勝)

半兵衛が伝えた土窯は画期的なものでした。なぜ画期的だったのでしょうか。これを考える前に炭窯の種類を整理してみます。

### 炭窯の種類

#### ①穂伏せ(ほふせ・ほっふせ)焼

地面に穴を掘り籾殻の薫炭づくりのように真ん中に煙突を立て火を燃やして燠火(おきび)をつくり、燠火の上に炭材を載せ地表面を土砂で覆い炭を焼きます。炭化が終わったら土を取り除いて炭を出します。炭の品質はあまり良くありません。

#### ②むじな窯

固結した山砂層などに横穴を掘り窯の本体とし、窯口と小窯の一部には石を使い作ります。昔、市宿の三経寺から開墾へ登る山道沿いにありました。今でも西日笠の三秋橋の上に廃窯があります。

#### ③石窯

窯の腰から天井まですべて石でつくります。天井はアーチ構造になるので石の噛み合わせがポイントです。石は火に強いものが必要ですが高岩石と呼ばれる砂岩は耐火性に優れ窯づくりには適していました。

高岩石は江戸の中期に伊豆の国から石切

り職人が来てから本格的な生産が始まったように家の土台や墓石、階段などにも広く使われていました。

#### ④土窯

石窯と同様の構造です。窯口と小窯以外は石をあまり使わず、窯づくりに適した粘土などの土があればどこにでも比較的簡単に作ることができます。石窯と同様に高温でネラシをすることができ密閉性が良いので良質の炭が焼けました。

#### ⑤鉄板窯

近代になり鉄板が手に入るようになると五厘板と呼ばれる厚みの鉄板を天井

に使うようになりました。鉄板の天井は横に渡した丸太から吊り下げられたので吊り天井窯とも呼ばれています。

#### ⑥改良窯

耐火セメントを使って作る窯です。したがって形は自由に作ることができるので、



【天井が丸い土窯】

炭材の出し入れを横から出来るようにしたものもあります。

以上六種類の炭窯をあげましたが、半兵衛が活躍していた頃は①から④の窯です。

半兵衛が伝えた土窯が画期的であったといわれるためには、①から③の窯に対して画期的であったということになります。

①は簡単に作ることができ炭の品質は良くありません。②は土質や地形に左右されるので作る場所が限定されてしまいました。したがって良質な炭を焼くことが出来た③の石窯に対して半兵衛の土窯は何か画期的であったということですが。

次回はその何かを考えてみます。

(木曾野正勝)

ここに石窯の方が土窯より先に炭焼き窯として使用されていたという資料がありません。

岩槻藩勝浦領の内、薪炭生産地として重要だった養老川上流筒森村奥山御林の山守と岩槻藩地方役所との炭焼き方に関する取り決めをした明和三年(一七六六)六月三日、「差上申御請証文之事」の文書です。

(前略)

一炭焼賃金老両二八拾俵 但俵入六貫目

俵拵共仕立

但是迄者石釜焼二候所今度相改土釜やき手  
馴候もの吟味仕相抱三日宛之留焼ニ仕随分  
上炭ニやき出し可申候

(後略)

この文書は常盤半兵衛が亡くなる六年前のもので「これまでは石窯で炭を焼いていましたが、これからは土窯で焼く技術者を雇って良い炭を焼きます。」と書いてあります。半兵衛は宝暦年間にこの地へ来ていますので、すでに土窯で炭を焼く方が石窯より有利なことが評判になっていたものと思われる。

高岩石に代表される様に、この地では耐火性に優れた砂岩がどこでも手に入ります。したがって石を用いた炭焼き窯が初めにあったということもうなずけます。

それでは石で炭窯をつくった場合、石はどのくらい必要だったのでしょうか。

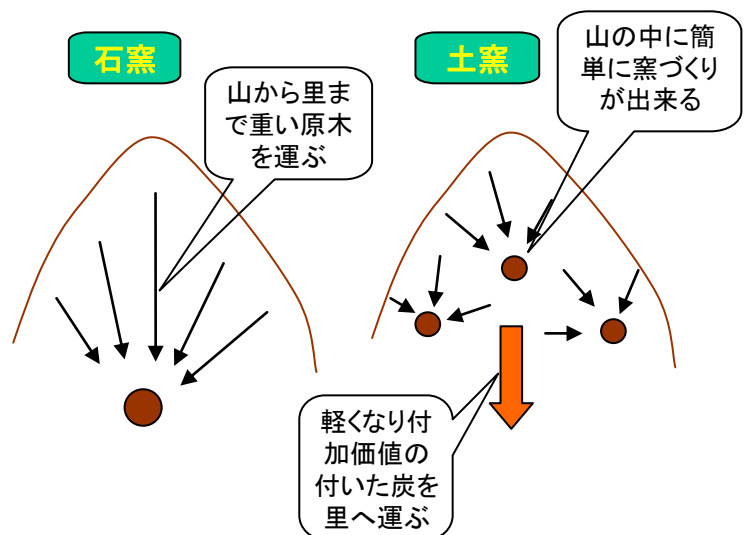
大正十二年一月に東大千葉演習林では周辺でつくられていた石窯を忠実に再現し、詳細なデータを収集記録しています。

これによりますと、通常用いられる窯をつくるのに、九二四貫(約七、二トン)の石が必要でした。大型ダンプカー一台分の石です。こんな大量の石を山の上まで運ぶことはとても不可能です。したがって石窯は石材運搬可能な山麓や石材産出地周辺に限られてしまいます。

それに比較し、土窯は土さえあればどこにでもつくることができます。

木炭生産地であった清和県民の森の様に小さな沢が入り組んだ所で、山から山へ炭窯を移動しながら炭焼き作業をするためには、土窯の方が石窯に勝っていたことはいなげますね。

これが、土窯が石窯に対する画期的だった理由なのです。



※参考文献 平成十五年、尾崎晃・渡邊高弘共著  
「千葉県南部における木炭生産」  
(木曾野正勝)

半兵衛の生誕地を訪ねて(その一)

常盤半兵衛の生誕地は、神奈川県湯河原町鍛冶屋です。鍛冶屋集落は湯河原駅から山裾を北方向へ進んだ新崎川上流に位置しています。半兵衛炭の会では毎年鍛冶屋を訪ねていて、最初に訪問したのは平成十五年七月十四日、土窯づくりが一段落し天井づくりを前にした時でした。

当日は事前に連絡をさせていただいた駅前にある湯河原町図書館の峯さんから資料をいただき鍛冶屋へ向かいました。

鍛冶屋集落は箱根の山が海まで押し寄せている谷間にあります。集落の上流突き当たりには標高六二六メートルの幕山がそびえていて、山裾には四千本の梅林が広がり花の時期にはとてもみごとです。

常盤半兵衛の手掛かりを求めするため、私達は鍛冶屋集落唯一のお寺である黄檗宗瑞応寺を訪ねました。当日は吉浜のお盆で住職は不在でしたが住職のお母さんが親切に対応してくださいました。

何うと常盤姓は鍛冶屋に二十数軒もあるとのこと。そこで檀家総代の常盤春夫さんを紹介していただきました。

八十半ばを過ぎた晴夫さんは「そういえば市宿の顕彰碑除幕式に呼ばれたということを聞いたことがあるなあ」と話してください、もう五十年前の話なので記憶が定かではないようでした。ちょうど息子さんの清司さんがおられて、「古い人の話なら江戸時代から続いている本家がいいよ」と常盤定敏さん宅に案内してくださいました。

常盤定敏さんは当時九十四歳、常盤半兵衛の生家を訪ねてきたと話すと、目を輝かせ炭を焼いていたころの話をされ、私のノートに炭窯の絵をふるえる手で描いてくださいました。それは私たちが作っている土窯そのものでした。

鍛冶屋は古くから幕山の鉾山から産出される鉄鉾石で粗鉄(カナクソ)をつくり、金を生産していたそうで、定敏さんの家にも戦前まで粗鉄が沢山あったそうです。

いつもは廊下の椅子に腰掛けて外を眺めているだけの定敏さんですが、炭の話に熱が入ってきたのか庭に降りてきて裏山の窯場の話をしてくださいました。

後日お聞きした話では、元気で私たちにお会いして下さった定敏さんが一ヶ月後に亡くなられたとのことでした。それはと

ても残念であるとともに、あたかも常盤半兵衛が私達を定敏さんに合せようとした因縁があった様にも思われ、思わず合掌いたしました。とても不思議な出来事でした。第一回の訪問では具体的手がかりは得られませんでした、その後も毎年梅の花の咲く時期に訪れることになりました。

(木曾野正勝)



【常盤定敏さんの描いた絵】

(タイトル) 連載 土窯半兵衛 第5回  
半兵衛の生誕地を訪ねて(その二)

平成二十二年の春先は天候不順が続きました。年度末の忙しさのため鍛冶屋訪問を果たせずにいた三月九日のお昼時に、鍛冶屋の瑞応寺住職御夫妻が外房に行く途中とのことで訪ねて来られました。

早速「ちっちゃな土窯資料館」で半兵衛の足跡を説明し、三経寺の常盤半兵衛の墓へご案内いたしました。

住職は、星野家文書に出てきた半兵衛にとってもかわりの深かった常盤有右衛門について、過去帳を調べてくださったとのことでしたが、今までに手掛かりがないとのことでした。



住職は、お墓にお経を上げてくださった後「家紋が分かれば手掛かりになるのだが」と話され、墓石を調べましたが見つかりませんでした。半兵衛の墓石について、「星野家日

記」安永二年四月には次のように記されています。

一廿四日日和よし○相州土肥鍛冶屋村常盤有右衛門殿より同苗半兵衛殿石塔大堀二郎右衛門舟二而江戸より参川舟介二郎乗二而廿日二此方迄相届キ廿一日二三経寺様へ御願申上かひげん(開眼)供養いたし申候

墓石は常盤有右衛門が鍛冶屋で作り江戸經由で小糸川を川舟で送られてきたもので次のように刻まれています。

【正面】

安永元辰年

心縁常性信士

十二月十一日

【左側面】

相州土肥鍛冶屋村

俗名常盤半兵衛



住職は「この墓石は確かに鍛冶屋周辺の石です。もつと硬い石もあるのですが当時は加工技術がなかったのではなかっただけでしょうね。」と話されました。住職の「石の

加工技術」という言葉に、私は長い間抱いていた「鍛冶屋ではなぜ土窯による炭焼きが発達していたのか」という疑問がことによると氷解するのではないかと感じました。確かに伊豆半島中部から湯河原箱根にかけては安山岩地層であるという。江戸城の石垣の九十五%は伊豆石だ。鍛冶屋には高岩石のように加工しやすい砂質の凝灰岩はないのだろうか。だから土による炭窯づくりが発達したのかもしれない。

毎年鍛冶屋を訪れながらどうしてこのことに気付かなかつたのだろうか。なんとしても現地を確認しなくては。

四月には必ず鍛冶屋にお伺いすることを住職に約束してお別れをいたしました。

(木曾野正勝)

半兵衛の生誕地を訪ねて(その三)

東海道線が小田原駅を過ぎると急に山塊が海岸に迫ってきて根府川駅に着きます。

ここにはむかし根府川関所がありました。安永元年十二月七日、半兵衛が病気になった時、鍛冶屋村の常盤有右衛門へ状況を知らせるため、市宿の飛脚はここを通過して行きました。

平成二十二年四月二十九日、私は再び鍛冶屋を訪れました。いつもお世話になっている常盤清司さんに瑞応寺へ同行していただきましたが、丁度瑞応寺では法事を控えていてとても忙しそうでした。しかし住職の奥様が親切に対応してくださいと、常盤家数家の墓石を拝見いたしました。有右衛門の名前は発見出来ませんでした。



今回訪問のもうひとつの目的は、高岩石のような凝灰岩があるのかという確認でした。清司さんにお聞きすると

古くから「釜石」として台所の煮炊きをする竈に使われていた石を産出する山があったということ、その石は今も瑞応寺への道筋にある民家の土台や積石に使われていました。「火に強い石」は沢山産出されていたのです。



常盤清司さんは法事に出るとのことなので「釜石」が採掘された場所をお聞きし、現地を確認することにしました。

採掘場所は幕山梅林からハイキングコースを一の瀬まで行き、「ししどの窟」入口から菜畑林道を進んだ左上にあるということでした。林道沿いには崩れ落ちた凝灰岩が所々散らばっていて持ち上げてみると高岩石と比べてとても重く、火砕流等が固まったものようです。林道を一時間ほど歩きましたが現地に精通していない身では採掘場所を確認することはとても無理でした。しかし耐火性のある凝灰岩は確かにありました。ではなぜ炭窯は石窯でなく土窯だったのでしょうか。石が重くて大きな窯づく

くりには適していなかったのでしょうか。あるいは材料ではなく何らかの理由で土窯づくりが発達したのでしょうか。

半兵衛の謎を追って

土窯づくりからはじまって、半兵衛を訪ね七年が過ぎました。なぜ鍛冶屋は土窯による炭焼技術の先進地だったのか？そして半兵衛の生家は？なぜ半兵衛は君津の山奥にやってきたのか？等々疑問は見出せないばかりです。

私の師事した古文書解読の先生だった故菱田忠義氏は、「平六はツゲを求めて大島へ行き、半兵衛は櫛を求めて君津へ来た」と時々話をされていました。そしてそうした謎解明の手がかりとして最も期待されているのが「星野家文書」の日記です。

これからもあせらずに日記の解読を進めるとともに湯河原町の皆さんと連携し、半兵衛の謎を追って行きたいと考えています。長い間有り難うございました。

※参考文献 「古老が語る鍛冶屋」 早藤巖著

(木曾野正勝)